
ドロップ

火野恭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドロップ

【Nコード】
N2834I

【作者名】
火野恭子

【あらすじ】
静かな男。哀しい女。
無気力故に家から出る事の出来なかった女が、
数ヶ月振りに外出したのは、何の為なのか。

着信メロディ「ドロップ」、あの男からの電話。

倦怠の底から引き摺り出されて目覚める。

時計、PM 5時17分。電話には出ない。

眠い。頭が重い。眩暈がする。

手探りでペットボトルを探し、散乱したボトルの一つを掴む。

蓋を開けて口に含んだら酸っぱい。

どうやら今日はハズレの日らしい。

ボトルを遠くに放ると、何か落ちてがしゃんと割れた。

部屋全体がゴミ箱のようだ。でもここには何も無いのと同じ。

あたしもゴミだと思いついて自嘲する。

もうこの部屋から何ヶ月も外に出ていない。

ベッドの上であぐらをかき、煙草に火をつける。

目を瞑って吸い込んだら闇が見えた。

2回目の着信メロディ「ドロップ」。

苛々する。電源を切る。溜息と煙はもつれながら押し出され舞う。

目を瞑り眼球を動かす。耳鳴りがする。

胸が痛む。だけど鈍痛でしかない。

家のチャイムが鳴る。

あの男でしか無いだろう。

いきなり来ればいいものを、何故了承を必要とするのか。

何故チャイムを鳴らすのか。

何も言わずに合鍵で入って来ればいい。そう思うのだが。

がちやり、とロックが外れる。

布団にくるまり寝た振りをして、耳を澄ます。

ビニール袋がざわつく音が聞える。

男は「寝てるの?」と聞く。

「どっちでしょう?」とあたしが言つと、

「分からない」と言つてベッドに腰を降ろした。

あたしも分からない。自分が起きてるのか寝てるのか。

正気なのか、そうでないのかさえ。

男は頭を撫でる。止めて欲しい。あたしは可哀相な子供じゃない。

腹が立つて「触るな」と言つて起き上がったら、

男は目を細めてあたしを抱き締める。

触るなど言っているのに。

男は部屋を掃除し始めた。

あたしはまたベッドに寝つ転がりそれを見る。

あたしは男を傷付けたくなる。

「嫌いだよ」と言う。

「知ってる」と返ってくる。

「帰つて」と言う。

「ここは僕の家だ」と返ってくる。

「一緒に暮らしたい?あたしは嫌よ。」と言う。

「それも知ってる」と返ってくる。

気に入らない。

恋人でもない女の為に自分の部屋を提供し、

抱けない女の為に部屋を掃除にくる。

病人を介護する様にあたしを扱う、あたしはこの男が嫌いだ。

世話をしてやるから抱かせると、言えばいい。

そしたら商売してやるのに。
愛してくれと言えばいい。

そうしたら、踏みにじって嘲る事が出来るのに。
あたしはまた男を傷付ける言葉を探す。

「あたしがアンタに甘えてる事が、
希望を持つ動機になっているなら間違いないよ」と言う。
「……………どこが甘えてるんだよ。
僕が居なくても生きていける癖に。」と返ってくる。

「従順で、世話好きで、馬鹿を見て、
良い人間で居る事ってそんなに快感？」と言う。
「快感でも苦痛でもないよ。ただ好きにしてるだけだ。」
と返ってくる。

「無償の愛とかって言葉好きでしょ？自己犠牲、とか。
あたしそういうの反吐が出る」と言う。
「言葉が好きなんじゃない。そういう代物が好きなんじゃない。
君が好きなんだ」と返ってくる。

同じ事だ、とあたしは思う。
傷付けたいのに、傷付かないこの男が嫌い。
見たい。傷付く姿を。動揺する姿を。泣き喚く姿を。
言わせたい。自己満足であり自己欺瞞であり欲があると。
修行僧の様なこの男を狂わせてみたい。
そしてあたしのこの感情は絶対に愛じゃない。

もう長い間、この生活と関係が続いて、
不毛な問いかけは尽きてしまいそうだ。

掃除を終えた男は煙草を吸い始める。

あたしはこの男を傷付ける事に今日も失敗したと思い、湧き上がる悔しさで、男の髪を勢い良く引つ張る。髪の本は何か抜けて男はしかめっ面をしてる。あたしは愉快になって笑う。笑い転げる。

瞬間、ギュッと煙草の火を消した男が、髪を掴んでるあたしの手首を掴む。

痛いくらい強く掴まれた手首、男はじつとあたしを見てる。あたしは嘲笑う。

心の中で強く思う。言えよ、怒れよ、理不尽だと。そして願わくばあたしを傷付ければいいと。

だけど男は言う。

「君の期待には応えない。君は僕を傷付ける事は出来ないし、僕も君を傷付ける気がない」

あたしはカツとして掴まれていない方の拳で男の胸を打った。言いたく無い。言いたく無い。だけど口が勝手に喋りだす。感情が大きく波打つ。

「どうして？何で？どうして傷付けてくれないの！どうして、傷付かずにいられるの！」

拳で何回も男の胸を打つ。溜まっていた涙が出る。

「あたしの事可哀相だとか勝手に思ってたんでしょ？見下してるんでしょ？」

アイシテルだなんて言葉で誤魔化して、救世主になってみたいだけでしょ？

あたしは棄てて欲しいの。どうしようも無い気分で居たいの。

何にも期待したくないの。

あんたみたいなのが居るから、居るから、
そう出来なくなってしまうのが酷く苦しいんだよ。」

掴んでる手首を引つ張って抱き寄せて男はあたしを抱き締める。

「触るな！」とあたしは怒鳴る。男は離さない。

更に力を込めて抱いて言う。

「君を可哀相だと思ってるのは、君自身だ。」と。

違う。違う。そんなはずが無い。

自己憐憫、そんなのあたしは大嫌いだよ。

だけどあたしはうな垂れる。

男は背中を撫でる。

「嫌だ。」

男はしばらくして体を離して、

無言で買って来た大量の食料品を棚に整理して帰って行った。

そしてあたしは今さら思い付く。あの男を傷付ける方法を。

着信メロディ「ドロップ」。あの男からの電話。

あたしは男が到着する前にこの部屋を出る。
靴を履いてドアを開ける。

何ヶ月ぶりに見た外の景色に、何の感慨も無い。

近所の公園まで出て、煙草に火をつける。

着信メロディ「ドロップ」。いつものように電源を切る。

あの男はそろそろ、あたしの居ないあの家に着く。
誰も居ない部屋を見て、

傷付いている姿を想像してあたしは喜びに震える。

久しぶりのミユール、歩きづらい。

よろよると、ふらふらと家に向う。

そっと、ドアを開けると、男の靴がある。

家の中を気付かれない様に探す。

男はベッドのある部屋で、俯いて静かに、静かに泣いていた。

あたしは後ろから気付かれない様に近付いて、

初めて男を抱き締めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2834i/>

ドロップ

2011年1月9日14時25分発行